

〈書評〉

# 近代日本におけるロシア研究の「自由主義的」な伝統？

松枝佳奈 (2021) 『近代文学者たちのロシア：  
二葉亭四迷・内田魯庵・大庭柯公』京都，ミネルヴァ書房

吉川 弘晃

## 1. はじめに

日本の言説では今なお、ロシア（あるいはソ連）は「近くて遠い」国と形容されることが少なくない。かつての悲惨なシベリア抑留や現在進行中の北方領土紛争といった政治・軍事的な対立面が日露関係の「遠さ」を規定する一方で、トルストイやドストエフスキー、三島由紀夫や村上春樹、アニメーションやコスプレイヤーたちが文化面での「近さ」を同じくらいに形成していることは否定できない。

19世紀以降の世界史を一瞥すれば、日本とロシアは平行な道を歩んできた。両国は同じタイミングで西欧化の荒波と葛藤しながら富国強兵策を採用し、君主を戴きつつも封建的体制からの脱却と立憲政体の確立へと進んだのだとすれば、両国の知識人が似たような課題を共有し、互いに交流したり、影響を与え合ったりするのは、いわば歴史の運命と言える。「近代」という問いを前に知識人たちが言語や国境を越えて共闘する「場」は、19～20世紀のユーラシア大陸の各地に見られた。西欧化との葛藤（受容と反発）をいかに経験したかという問題意識は、西欧諸国－日本の関係史を描く「近代化論」によっても、中国－日本の関係史を描く「東アジア論」によっても十分には回収できない。近代世界で「西欧」と「中華」という二つの文明圏の周縁（あるいは半周辺）に位置しつつも、自らの地域に一定の普遍性を認めることのできたロシアと日本の知識人たちであればこそ、以上の問題意識をめぐって精神的な紐

帯を形成できたのである。このような立場から、日露関係史の細かい事象を明らかにしつつ、それらを世界史的に位置づけ、普遍的な論点を出そうという野心的な試みは近年、Konishi (2013) や五百旗頭ほか (2015) など、日本の内外で増加している。

それでは、近代の日本知識人にとってロシアとは何であったのか。この問いは、以上の経緯から日本研究や東アジア研究にとって極めて重要であるにもかかわらず、多くの論点が見つからずのまま残っている。日本語・ロシア語・英語の3つを習得し、各地の図書館や文書館での調査を実践せねばならないからであろうか。その困難を足掛け10年に渡る努力によって乗り越え、以上の課題に取り組んだ成果が本書である。

本書は、明治・大正期の文学者たちから二葉亭四迷・内田魯庵・大庭柯公の3人を選び、彼らが日本における「ロシア研究」を確立する立役者となる過程を緻密に再構成することで、近代文学者たちにとってのロシア経験のひとつの系譜を明らかにしようという試みである。著者自身の専攻は比較文化・比較文学であるが(本書のもとになった博士論文は2019年度に東京大学総合文化研究科に提出された)、本書が依拠する先行研究は、日露文化交渉史・日本近代文学研究・日本思想史・日本ジャーナリズム史など極めて多岐に渡っている。著者は従来は別個に扱われてきた3人の業績を「ロシア研究」の歴史という新しい領域のもとに総合するという壮大な野心を掲げているのだ。それに見合うだけの概念提示・方法論・史料操作がなされているかどうかは本書全体の成否を分けるであろう。以下、前半で各部・各章についての要約とコメントを、後半で本書全体への批評を行う。

## 2. 本書の内容

はしがき及び序章(ロシアに対峙した近代文学者たち)では、近代日本の知識人たちが日露関係や両国の社会をいかに認識していたかという大きな問いを設定し、特に3人の文学者、二葉亭四迷・内田魯庵・大庭柯公を考察対象として選択する。本書の目的は、明治・大正期を通じて、ロシア事情の紹介・分析・研究を総合的に行い、その成果を文筆活動を通じて江湖に広く発信した代表的な「文学者」として三者を捉え、その活動や対露認識を検討・評価することである。ここで本書全体を貫く概念として「文学者」のほかに「志士」と「ロシア研究」が登場するが、その定義の妥当性については後で詳しく論じる。次に、本書の先行研究は数多の分野に渡る一方、それぞれが別個に3人の業績を扱ってきたため、彼らのロシア研究者としての役割を総合的に位置づけることができていないという。以上の課題を解決すべく、著者は日露双方の全集や未刊行史料、二次文献を徹底的に収集した上で、当時の日露両国の歴史的事情

を踏まえつつも、3人のテキストを細かい文学的表現に注目しながら精読するという比較文学・比較文化史的なアプローチを採用する。

第I部（二葉亭四迷のロシア）は、3人が作る系譜の出発点として二葉亭四迷の対露認識やロシア研究を明らかにしている。第一章（二葉亭四迷が生まれた土壌）は、まず数多の先行研究では、二葉亭の文学者としての側面に比べ、ロシア通の記者・文筆家としての側面が十分に検討されていないことを指摘する。その上で、少年期に受けた漢学教育と青年期に受けたロシア語教育（東京外国語学校）が彼の知的背景の骨となり、その文体や文学観を形成していく過程を論じている。

第二章（知露派言論人・二葉亭）は、明治30年代の二葉亭のジャーナリズム活動を扱う。二葉亭のメモや署名・無署名記事の読解を通じて、彼が日本の志士に値するものとしてロシアの知識人 *интеллигенция* に深い関心を寄せていたこと、トゥルゲーネフやドストエフスキー、ベリンスキーといった19世紀後半の文学者たちの作品を原書で読んで政治や社会の問題を考えていたこと、日露戦争時にはロシアの保守派の新聞トリバル派の雑誌を情報源に『大阪朝日新聞』での記事を書いたことが論じられる。二葉亭はロシア研究を通じて権力による言論弾圧や貧困などの社会問題に意識を向け、その対露認識はバランス感覚を備えていたという。

第三章（日露戦争後の二葉亭とロシア特派）は、日露戦争後の二葉亭の活動を取り上げる。この時期の二葉亭は、ゴーリキー、チェーホフ、ゴンチャロフといった同時代のロシア文学の批評や紹介し、そこからロシア社会思想の研究へと進んだ。ロシアの社会を観察するなかで、二葉亭はその視点を日本へと向け、一人の知識人として自国の「平民」や「輿論」とどう向き合うかという課題に取り組んだ。そこでは書物や論理による抽象論ではなく、社会的現実を実際に経験した上での「実感」に基づいた政論を重視した。対露外交については国防力を高めつつも民間による経済的な進出を進め、内政については漸進的な立憲民主主義を目指すべきとする彼の言論活動は、排外的な国家主義者や急進的な社会主義者のそれと一線を画するバランスの取れたものであったと著者は評価する。しかし、明治末期に特派員としてサンクトペテルブルクを訪れて日露文化交流を前進させたその直後に二葉亭は無念の死を遂げる。結論として、二葉亭はロシアに関する数多くの知識と深い洞察をもちあわせつつも本格的な活躍の場を得られなかった。彼のロシア研究者としての活動は、「志士」としての政治実践と「文学者」としての文筆活動との狭間に苦しむ明治知識人の生き様の証であったという。果たして彼の遺志は魯庵と大庭にどう受け継がれるのか。本章について細かい指摘を行うとすれば、二葉亭が残したメモの扱いについてである。このメモは二葉亭がロシア記者として残した数少ない痕跡だが、ほぼ単語の羅列や走り書きの分析・

解釈のみで議論が進められる箇所は、説得力を欠いている。テキストそれ自体の「読み」の限界を明確に示した上で、同時代のコンテクストを必要なだけ提示した上で、著者独自の推察を進めるとよかったのではないか。

第Ⅱ部（内田魯庵のロシア）は、副題にある通り、二葉亭の遺志を受け取った魯庵が主に英語圏の情報を介してロシア研究の啓蒙・実践に努めていく様を扱う。第四章（志士の理解者）は、魯庵のロシア研究について内外の知識人との繋がりを軸に検証している。著者はまず魯庵が二葉亭について書いた答辞文や追悼文を頼りに、志士の精神と気高い反骨精神をもった「自由なる思索家」として二葉亭に共感を寄せていたと論じる。次に、世紀転換期にイギリスのロシア研究者として知られた記者モーリス・ベアリングと魯庵の関係について言及し、実体験をもとにロシアを観察するあり方について、魯庵が二葉亭・大庭・ベアリングを並べて高く評価していたとする。本章はロシア研究者としての魯庵の位置づけを試みているが、これについて何よりも重視されてきたのは彼のロシア文学の翻訳・紹介（英語による重訳）である。当該テーマについては、その日露翻訳実践を加藤（2012）が、また彼の翻訳書の文献学的な意義を靛島（2012）が研究してきたのに対し、本書はジャーナリストとしての魯庵の対露認識に注目することで、二葉亭からのロシア研究者の系譜に彼を位置づけようとしている。

第五章（思想・言論弾圧への抵抗としてのロシア研究）は、魯庵のソ連や社会主義への認識や、日本政府の思想弾圧への抵抗のあり方に焦点を当てる。著者はまず、魯庵が雑誌『太陽』に多数寄稿したロシア関係の記事（1904～23年）を概覧し、善良な皇帝ニコライ2世のもとでロシア帝国が漸進的に民主化していくことを魯庵が期待していたこと、十月革命勃発後はボリシェヴィキによる政策の急進性や実現可能性に疑念を抱いていたことを確認する。次に、同誌掲載の随筆「労農政府の承認問題」（1923年）の精読の結果、魯庵が合州国の記者の手によるロシア革命に関するルポルタージュを情報源としていたこと、社会主義や共産主義の急進性からは距離を取りつつも自由主義の立場からこれらの思想を「危険思想」として弾圧することには断固として反対したことが明らかになった。専門知識をもつロシア研究者というより、ロシア事情を一般に広く啓蒙した知識人として魯庵は評価されるべきであり、さらに世紀転換期でロシア事情を論じること自体が、日露両国が抱えていた言論弾圧という問題を批判的に浮き彫りにすることであったと結論づけられる。本章については同時代の歴史理解について不適切な記述が若干見られる。まず、ボリシェヴィキがナロードニ

キ系の革命運動の系統にあったという魯庵の認識を「見当違い」とする(255頁<sup>1</sup>)著者の判断は一面的である。レーニンの革命独裁論は「人民の意志」Народная воляのП・Н・トカチョフに影響を受けており、さらにフランスのブランキ派やジャコバン派にまで遡ることが思想・運動史において指摘されているのだから(早坂1999)。また魯庵の「見当違い」の原因をロシア語への無知に帰する著者の説明も早計だ。当時のロシア帝国の革命家たちはロシア語だけでなく、(特に亡命者は)フランス語やドイツ語、英語でもしばしば執筆していたことをどう考えるのか。なお、1922年4月当時、共産主義思想に対する抵抗感が非常に強かった欧米諸国からソ連と国交があったドイツを排除しているがこれも誤りである(260頁)。実際には、23年まで事実上の内戦状態にあったドイツでは、革命の伝統をもつフランスにまして、反共感情が反ユダヤ主義と結びながら(しばしば暴力を伴って)強烈に作動した。

第三部(大庭柯公のロシア)は、二葉亭の同志であった大庭が海外での実地報道の経験を重ねてロシア研究の実践者として成長していく様を扱う。第六章(志士の挫折と再生)は、大庭がロシア通の記者として自立していくまでの時期に注目する。著者は第一に、大庭に関する先行研究や史料状況を整理し、その問題点を指摘する。若き大庭はロシア語教育を受けながら志士としてロシアと対峙する意識を強め、対露開戦前にウラジオストクに渡って二葉亭とともに極東ロシアでの経済諜報活動を遂行する。日露開戦後、静岡でのロシア軍捕虜ニコライ・ラッセルたちとの交流を通じて出会った社会主義思想は大庭の行動人としての性格を強めることになる。また1906年にウラジオストクで抑留された際、獄中で差し入れられたロシア語聖書に残された書き込みを頼りに、大庭はこれを宗教書としてでなく、世のため人のために行動すべしという実践的教訓の書として読解したと著者は推察する。その後の大庭は『大阪毎日新聞』や『外交時報』などの媒体で、ロシア事情にとどまらず、世界各国の情勢について筆を振った。本章が示す通り、著者による大庭旧蔵聖書の発掘・検証は大きな業績であるが、その分析手法と議論の進め方は注意を要する。著者は、聖書に傍線が引かれているかどうかだけで、その箇所が大庭にとって重要かどうかを判断している(328頁以下)。貴い歴史の痕跡と優れた想像力の上に表現された大庭の精神的な転機は、本書全体にとって最も美しい見せ場であるだけに、第三章で指摘したのと同様、学術的な議論として説得力をもたせる工夫が欲しかった。

第七章(「北隣の巨人に接せよ」)は、大正期の大庭のロシア取材・評論を取り扱う。『東京朝日新聞』への入社直後(1914年)、第一次世界大戦が勃発したため、ロシア通の

1 丸括弧内の頁表記は原則、書評対象本の頁数を示している。



大庭は特派員として東部戦線に派遣された。ロシア軍の取材には、ロシア人以外に協商国の記者が参加していたが、著者は大庭の従軍記事を、各国記者の記録と相互に比較・参照することで、東部戦線という国際的な報道活動の場を再構成している。著者によれば、実地観察をもとに具体的なエピソードを交えて包括的にロシア社会を論じるという点ではイギリスのロシア研究が優越しており、ここではバーナード・ペアズの従軍ルポが高く評価される。これに対して大庭の従軍記は、軍事や戦闘状況の細かい記述は不十分なものの、広範な地域での取材をもとに、リズム感のある文体で現地の風土・社会・文化・風俗を生き生きと描いているという。帰国後に刊行された大庭の著作は、近代日本の本格的なロシア論の先駆けであると著者は評価する<sup>2</sup>。

終章では、これまでの議論が総括され、結論が提示される。すなわち、二葉亭・魯庵・大庭は、政治・地理・思想・文学など様々な分野における知識、社会に対する批評精神、豊かな文学的才能を通じて、近代日本のロシア研究を担った。そこに共通して見られたものこそ、日本国民の自由と幸福、知的な進展、国家の平和的拡大を希求する知識人の「経世済民の志」であるという。本章の最後に、明治・大正期の日本知識人における3人の位置づけについて論じられるが、これについても後で批判的に述べることにする。

### 3. 本書の批評

本書は、明治・大正期の日本知識人のロシア観という大きなテーマについて、二葉亭・魯庵・大庭という3人の文学者を中心に一つの像を描く野心的な試みである。各分野に散らばる先行研究を踏まえつつ、日露両国の多数の施設で新たな史料を調査・発掘し、英語圏を含めた知られざる国際的な知的な繋がりを見出したことは、著者の大きな功績であろう。厳選したテキストを丁寧すぎるほどに検証・読解するという著者の態度は、附属資料を含めて500頁を越える本書の物理的な「重み」に反映されている。

だがその「重み」は何のためにあるのか。あるいは、その「重み」を受け止めるだけの分析概念や研究対象はいかに設定されているのか。無論、著者が目を通した文献や資料を全て読んでいないわけではないので、評者の無知や理解不足もあるだろうが、それでも率直に言えば、以上の問いに対する答えは、本書それ自体からは読み取るこ

2 本章で当時の英語での代表的なロシア研究書として著者が挙げるエミール・ジョセフ・ディロンの *The Eclipse of Russia* は(408頁)、成田富夫による邦訳(『ロシアの失墜:届かなかった一知識人の声』成文社、2014年)が出版されているが、本書には記載がなかったので指摘しておく。

とはできなかった。以下、そのような事態を招いたと思われる3つの問題点を指摘・検証した上で、評者による提言を加える。

### (1) 分析概念の問題

第一に、「志士」・「文学者」・「ロシア研究」という本書の基本となる分析概念（著者曰く「キーワード」）に問題がある。まず、本書において「志士」とは「明治・大正期に冷静な愛国心に基づき、経世済民や外国の脅威への対抗のため、国家経営を志して社会的活動や啓蒙に従事した人物」として定義される（2-3頁）。そもそも「冷静な愛国心」とは何を指すのか。ほとんどの知識人は自分の愛国心をそれぞれに「冷静」であると認めるだろうし、「愛国」のベクトルだってそれぞれに異なるだろう。次に、著者は比較文学者の平川祐弘の言葉を引用し、「文学者」とは「狭い意味での文士ではなく、文壇史的な文学史では把握できかねる幅の広い人物」とするが（3頁）、これでは概念として解釈の幅が広すぎるように見える。

確かに「志士」や「文学者（文士）」は、本書が対象とする明治・大正期の日本知識人たちにとって深い意味をもち、であればこそ誰がどこでいつ使うかによって意味が大きく変わる言葉であった<sup>3</sup>。とすれば、両者を本書全体を貫く鍵概念として設定しつつも、それらに厳密な定義を下さないでおくという著者の戦術が相応しいことは理解できる。とはいえ、歴史的概念の通時的な流動性に寄り添う立場を取るのであれば、少なくとも、それらが扱う時空間のなかでどのように変化していったのか、また二葉亭たちの言説でいかなる機能を果たしたかについて、要所所で説明すべきである。またその際、「志士」と「文学者」という概念を規定するナショナリズムや文学（史）観についての著者自身の理解が、明治・大正の同時代人や先行研究に対していかなるものであるかを示していれば、議論の土台はより堅固になっただろう。

さらに「ロシア研究」とは「社会科学・人文科学の分野を問わず、歴史学と地理学を基礎に、政治や外交、軍事、経済、社会問題のほか、民俗学および風俗、文学、芸術、思想にわたる広範なロシア事情・情報を網羅し、ロシアの国民性や民族性を把握するよう（原文ママ）とする営為」であり、「総合的あるいは学際的、分野横断的な知の

3 同時代に使われていた言葉を、現在の我々が使う際には、言葉の歴史をよく踏まえる必要がある。例えば、本書は先行研究のパラフレーズであるとはいえ、何の断りも入れずに「支那や大陸の志士」（136頁）という表現を用いているが、やや不注意な印象を受けた。少なくとも東アジアでは否定的な歴史＝政治性を帯びてしまった表現に触れる際には、鍵括弧を用いて歴史的用語であることを強調するか、「支那」という表現が適切である理由を書くべきである。

あり方を指す」のだという(3頁)。これも分析概念としては疑問が残る。本書に関わる限りで近代学問史を乱暴にまとめれば、19世紀から20世紀にかけて、社会科学の台頭と学術制度の発展が人文・社会分野の専門分化を推し進め、やがてその功罪が認識されるようになって初めて、諸分野を大きな理論で統合していく「学際性」が求められる。とすれば、著者の指す「ロシア研究」なるものは総合的というより、未分化であったと捉えてはどうだろうか。どうしても「総合性」や「学際性」に拘るのであれば、それらが現在に近い立場から投げられる概念であることに注意を払った上で、叙述を進めることもできるのではないか。

## (2) 歴史的条件の把握をめぐる問題

第二に、本書の叙述が前提とする歴史的条件への理解には違和感がある。日本のロシア研究の「青春時代」を、自由を求めて国境を超えていく高邁な情熱と理想をもった3人を主人公に描く物語は、——道半ばで病に斃れた1人の夢を残りの2人がそれぞれのやり方で実現させていくという筋立て plotting を含めて——「坂の上の雲」をどうの昔に登り切った人々の眼には、甘く切ないセピア色の教養小説 Bildungsroman として燦々と輝くことだろう。いかなる歴史叙述も特定の史観から逃れられない以上、著者がある種の進歩史観を選択することに異論はない。だが、自身が選んだ史観では見えない点に十分に自覚的でない限り、歴史叙述はしばしば奇妙な曖昧さを残し、対象の評価を不自然なものに見せてしまう。本書にそうした箇所が散見されるとすれば、それは著者が歴史的条件を把握する方法が、昨今の日本近代史の研究水準からすれば少なからぬ問題をはらんでいるからである。少なくとも以下の点は再考に値する。

まず、明治の知識人を捉える際、国家と社会を二項対立で捉えてしまっている。確かに明治期の日本政府は讒謗律や治安警察法を通じて思想・言論弾圧を行ったが、天皇を中心とする統治の形態そのものを疑った知識人は急進的なアナキストを除いてほぼ皆無である。また、国家と個人の目的がズレを見せはじめ、国家とは別領域として「社会」という概念が知識人によって盛んに議論されるようになるのは1910年代以降であると言われる(飯田泰三たちの「社会の発見」論)。とすれば、「弾圧する国家」と「抵抗する社会」の静的かつ単純な二項対立を貫くのではなく、明治中期から大正期に「国家主義」や「社会」といった概念がいかに変動していったかについて、周辺領域の先行研究を頼りに論じることもできたのではないか。

次に、3人を評価する基準が、19世紀後半の国際関係の前提と齟齬をきたしている。本書を読めば、少なくとも二葉亭と大庭は日本の国益に奉仕するナショナリストであることが分かる。だが、その立場を過剰に擁護しようとする著者は、「武力侵攻を是



とする国家主義者たちの対露強硬主義」(137頁)なるものを両者の敵役として対置するが、これを代表する人物・団体・言説への具体的な分析は見られない。また国益追求においてロシアへの経済的進出を求めただけで、武力での侵略は想定していなかったとして、著者は2人の立場を高く評価するが(139頁)、これは同時代的観点からすればあまりに表面的な評価である。帝国主義時代には、政治・軍事的利権と経済的利権は不可分であった一方、「文明国」の規範として国際法が機能していた。そのため、自国民の経済・文化活動の「自由」を保護するという大義名分があれば、武力行使は正当な行為であるとされた。したがって、「国家」による「武力的」な(政治的)侵略と「民間」による「平和的」な(経済的)進出との間に決定的な判別基準を与えるのは、同時代においても極めて難しかったと言える<sup>4</sup>。両者は状況に応じて清濁併せ呑むべきものであり、一方を正義、他方を悪とするものではない。そうした国際関係観こそ、二葉亭・大庭たち「志士」が共有していた「実感」に近いのだとすれば、対露交渉論者と対露強硬論者はむしろ同じ議論の前提を共有していたのではないか。そこに二葉亭と大庭の言説を位置づけることができれば、彼らのナショナリズムの位置づけが明快になるように思う。

以上で指摘した通り、本書は歴史的条件を単純化して叙述を進めたため、その焦点は結論に至るまで絞られないままである。終章によれば、3人が共有していた要素とは、(1) 経世済民の志、(2) 反権力志向、(3) 個人の自由の擁護、(4) 在野の自由な立場、(5) 観察・実感の重視であり、彼らは漸進的な立憲主義的改革を求めて活動した自由主義者であったという(428-430頁)。だが、明治・大正期の知識人にとってこのような「自由主義的」な路線は決して珍しいものではなく、これでは3人の主人公たちの顔はぼやけたままである。なぜ「ロシア研究者」にこだわるのかという本書全体の根源的な問いに、せめて著者なりのフォーカスだけでも示してほしかった。また、もし日本のロシア研究の輝かしい出発点に「自由主義的」系譜があるとして、それが〈ここ・いま〉の「スラヴ研究」にどう繋がるのか、あるいは繋がらないのか。このアクチュアルな問いについても、(課題や展望での多弁ぶりにかかわらず)本書は口を固く閉ざしたままだ。

### (3) テキストの比較・読解手法の問題

第三に、著者のテキストの位置づけや読解のあり方に問題がある。近代日本のロシ

4 例えば、二葉亭や大庭の友として本書に一瞬だけ顔を出すジャーナリストの陸羯南は『国際論』(1893年)で、政治的侵略と経済的進出をそれぞれ「併呑」・「蚕食」と称し、国家の安全保障においては後者をこそ警戒すべきだと論じた。

ア研究を相対化するため、これを同時代の欧米のロシア研究との比較・連関を通じて検討するという本書の方法論は適切である。ロシア研究の対象・目的・あり方は、各国家・国民のロシアに対する利害関係や認識によって大きく変わってくる。複数のロシア研究を比較することは、世界各地でのロシア像の多元性を観察することであり、それを通じて各国の知識人の問題意識を逆照射することができるだろう。

だが本章の第四・五・七章が明らかにするのは、結局のところロシア研究において日本はイギリスの後追いであったということに過ぎない。この主張は、魯庵がベアリングの書籍に影響を受けたことや、東部戦線の取材で大庭とベアズが行動を同じくしていたことくらいにしか依拠しておらず、そもそも説得力に欠ける。次に、イギリスにとってのロシア研究の位置づけは述べられているが、日本の場合との比較的検証が不十分であるため、英日でのロシア研究の役割や性格の違いが全く見えてこない<sup>5</sup>。著者がロシアの「国民性」や「民族性」なるものを本質主義的に前提し、かつそれらを「客観中立的」に理解・説明できるとする「超越的」立場を取るのであれば、過去の複数地域のロシア研究に直線的な優劣をつけることはできるだろう。だが、それではロシア研究の歴史的な多元性を無視したロシア像（認識）の研究になってしまわないだろうか。

さらに、著者は「欧米」のロシア研究を扱うように見せながら、実は英語圏以外、特にフランス語・ドイツ語圏のロシア研究にほとんど注目していない。ヨーロッパでのロシア像の形成が両言語で書かれたロシア関係の出版物に大きく影響されたことは本書の議論では無視できないはずだ。例えば、著者はベアリングを高く評価する魯庵の叙述から、フランスのロシア研究者のアンリ・ジャン・バプティスト・アナートル・ルロア＝ポーリュウの綿密な調査に基づいた学術的な記述と、イギリスのベアリングの実地観察と直感に基づいた総合的で読みやすい記述という二項図式を読み取って後者の方しか検討しない（220-227頁）。しかし、ルロア＝ポーリュウがもとはエッセイストであり、そのロシア論の代表作『ツァーリの帝国とロシア人』*L'Empire des tsars et les Russes*（1881～89年）は、第1巻の初版序文が示す通り、フランスの文芸誌『両世界評論 *La Revue des Deux Mondes*』に自らの実地観察に基づく文章を1872年から連載したものがもとになっている。ここで改めて著者の以上の二項図式

5 扱う時代は異なるが、戦間期の日本知識人やエリートによるロシア革命像を包括的に論じた Linkhøeva（2020）は、イデオロギーの左右を問わず、日本の対露・対ソ認識は一貫して大陸利権と結びついていたので、そのロシア革命論も常に中国革命と結びついていたとする。近代日本のロシア研究の性格や位置づけを相対化する上で重要な指摘であると思われる。

の基準を知りたいのだが本書にその答えは見当たらない。ルロア＝ポーリューの成果に学びつつも一般読者に向けて読みやすいロシア論を書くのだという、ベアリング自身の目標はどれほど達成されているのか。その問いに向かって、両者を丁寧に紐解けば、魯庵の見ていた「ロシア研究」界を、魯庵自身よりも高い精度で認めることができるのではないだろうか。

なお、著者は日英のロシア研究について1870年代以降から叙述を始めているが、「西欧」のロシア論を考える上でせめて、アストルフ・ド・キュスティエヌの『1839年のロシア』*La Russie en 1839* (1843年) やアウグスト・フランツ・フォン・ハクストハウゼンの『ロシアの農業』*Die ländliche Verfassung Rußlands* (1866年) などの研究にも目を向けてはどうか。前者はフランスの外交官がニコライ1世治下のロシア各地を観察し、その記録を書簡形式で著したもので、後者はドイツの農学者がロシアの農村共同体を観察・検討したものである。特に皇帝の専制と社会の矛盾からロシアの後進性を厳しく批判する前者は、同時代のヨーロッパのロシア像を強く規定した。ゲルツェンなどのロシア知識人は、現在まで根強く残る西欧からロシアへのある種の「オリエンタリズム」(ないしロシアから西欧へのコンプレックスの感情)と格闘していくことになる(長縄2015)<sup>6</sup>。これは「欧米」、少なくともヨーロッパ世界でのロシア認識・研究に触れる上で絶対に避けられない論点である。「先進的な西欧」と「後進的な我々」というジレンマは、ロシアでは西欧派とスラヴ派、日本では欧化派と国粹派として、両国の知識人が共に抱えた実存的な課題でもあった。著者がロシア(ソ連)・欧州関係史にどれほどの関心をもつのかは分からない。だが、日露の知識人が自らの社会の「後進性」とその「改革」とともに意識していたという点が本書の重要な縦糸をなすことを考えれば、ロシアをめぐる英語圏だけでなく「西欧」からの／への視線は、著者の研究の裾野を大きく広げるはずだ。

最後に、本書でのテキスト読解について一言。本書は、二葉亭たちの残した多くのテキストを論じるというよりかは、そのうちのごく一部を厳選した上で、一文一文を丁寧に読み取る手法を取る。つまり、膨大なテキストから事実関係を解釈するのではなく、限定的な引用テキストを丹念に精読する文学研究としては王道の手法を取っている。だが、引用部分のパラフレーズや個々の事象の註解が詳しいのは親切である反

6 例えば、A・H・ソクーロフ監督は2002年に公開した映画作品『ロシアの箱舟 *Русский ковчег*』(邦題:エルミターージュ幻想)のなかで、ソ連崩壊後のロシア人の(西欧に対する)民族的アイデンティティの不安定さやジレンマを扱っている。ひとりの現代のロシア人が「ロシア」が経験してきた長い時空間を旅するなか、「ロシア的伝統」に厳しい偏見と軽蔑を向けてくる「他者=西欧」の象徴としてキュスティエヌが描かれている。

面、その構成や文体についてもっと踏み込んだ分析があるとよかったのではないか。著者は、各者のテキストをくどいほどに引用して、これは漢文調を取り入れた文章である、リズムのある見事な文体である、流麗な筆の運びであるといったコメントを加え、そこから、決して専門的な知識や精密なデータには回収されない、優れた「実感」に基づく「文学性」を見出そうと試みる。確かに傑出したテキストは、構造論的分析を跳ね除ける「語りのあり方」や容易に論理化できない「時代の雰囲気」を含むことがしばしばある。だが、そのテキストがいかなる叙述形式や文体的特徴をもつか、またいかなる観点から優れていると言えるかに点について、同時代の「志士」や「文学者」との共通点や相違点を踏まえ、より細かく示していれば、3人の表現者としての才能をより効果的に訴えることができただろう。本書の膨大なテキストの読解作業は、彼らが何を認識したか（しなかったか）という問いだけでなく、彼らがいかに表現したか（できなかったか）という問いに捧げられているはずだ。

以上、問題設定の部分から細かい箇所に至るまで数多くの問題点を指摘してきたが、それは決して本書の意義を否定するものではない。日露文化交渉史あるいは対露認識史の大きな空白を、綿密な文献調査を通じて埋めたのは評価に値する功績であり、本書はその第一歩として捉えられるからだ。また、評者が提起した3つの問題点は、必ずしも本書にのみ限られたことではなく、近年の国際関係史や学史研究、文化交渉論ではしばしば見られることである。逆に言えば、当該分野には多くの課題と可能性の余地が残されているとも言えるのである。

最後に本書評を通じて評者が得た一つの所感を述べる。それは本書が「ロシア（地域）研究」に対して行ったように、ある学問や文化の「領分」を歴史化することの難しさである。近年、日本でも科学認識論・科学（制度）史への関心が高まっているが、その実践には、何よりもまず研究の当事者が〈ここ・いま〉に対してもつ、そして対象がそれに対してもっていた立場性とイデオロギーに自覚的になる必要がある。そこから生まれる両者の距離をもって初めて、知識の布置関係を動的に把握できるのだから。一見、実証主義的に見える手段の充実は、必ずしも実証「それ自体」を導くことにはならない。著者が明治・大正の「志士」や「文学者」に投影した「真の」学際性や総合性なるものがあるとすれば、それは究極のところ、地域によって発展のベクトルは異なるとはいえ、近代世界が共有してきた「批評」の態度、つまり「テキスト」を細かく読み、それぞれの異なりや重なりを広く位置づけるという「人文学」的知性に落ち着くのではなかろうか。評者自身もまた、ロシアやソ連を「批評」した者を「批評」するということ、抽象化して言えば、「関係」を「関係」づけることの計り知れ



ない困難と愉悦を共有する一人である。であればこそ、以上の言を自戒として擱筆とする。

### 参考文献

- KONISHI, Sho (2013) *Anarchist Modernity: Cooperatism and Japanese-Russian Intellectual Relations in Modern Japan*, Massachusetts, Cambridge
- LINKHOEVA, Tatiana (2020) *The Revolution Goes East: Imperial Japan and Soviet Communism*, Ithaca & London
- 五百旗頭真ほか (2015) 『日ロ関係史：パラレル・ヒストリーの挑戦』 東京大学出版会
- 加藤百合 (2012) 『明治期露西亜文学翻訳論攷』 東洋書店
- 長縄光男 (2015) 『ゲルツェンと 1848 年革命の人びと』 平凡社
- 齋島亘 (2012) 『ロシア文学翻訳者列伝』 東洋書店
- 早川真理 (1999) 『革命独裁の史的 research：ロシア革命運動の裏面史としてのポーランド問題』 多賀出版